

味読 郷土の本

評者 武田和夫

(眼科医、山形市)

五十嵐勝朗さんによる4冊目のエッセー集である。著者は寒河江市の生まれ。弘前大を卒業後、小児科医として大病院の無給助手から助手、講師となり、米カリフォルニア大サンフランシスコ校で研修をする。青森県内の各地の病院を経て国立弘前病院の院長で長い勤務医の生活に終止符を打った。45年以上生活した青森の地から、生まれ故郷の寒河江に戻り、今はやまがた健康推進機構(旧県結核成人病予防協会)の嘱託医をなされている。

ふるさとの山や川に囲まれながら悠々自適の生活。そこで著者は、行政の中心からほんの少し離れた市に住むと、新幹線からの乗り継ぎも不便になり、日本は中央中心、元気な若者中心のまちづくりであることに気づく。「日々の暮らしから医療、介護まで」との副題が付いた本書では、そうした

五十嵐勝朗著「北国から贈る明日へのカルテ」

医師の知識や経験 優しい人柄も

日々の思いがつつづられている。

一読して気がつくのは、「晴着似合さん」とか「目金掛男さん」という、登場人物の徹底的な仮名化である。第1章「津軽ととも」で述べられる、古き良き時代の飲み屋での会話や、弘前での思い出は時効なのであろうが、俳句の同人雑誌の話などは、知る人はあれかと推定できるかもしれない。しかし、医師对患者についての話題では、関係した人について手掛かりも消してしまう。周りの人への思いやりに、読者が自分のことだろうかと思っても、同じような人がいるものだと思うだけであろう。

第4章「医師の心得」の文章は、小児科医の故か、病人に対する優しい心遣いが随所に表れている。家族の介護が必要になった時の困った様子や、著者自身が脱水症による脳貧血で失神した時のこと。周囲が騒ぎ回復した後、患者さんには日頃「注意してね」といいながらと、自分自身を冷静に反省している。

最後の第7章「明日の行方」では、護岸工事などの影響で、小川から小魚がいなくなり水鳥も見なくなったことなど、身近な環境破壊について触れる。健診に訪れた限界集落の高齢者から、クマガリに下りてくるので、怖くて散歩もできないという話を聞き、将来の自然が自分の時代とはまったく変わるだろうと、孫の時代を心配している。

医師としての知識や経験が読みやすい文章の中にちりばめられ、著者の優しい人柄がにじむエッセーである。

(ポリッシュ・ワーク、1680円)

